

ボウフラが蚊になる！

園長 山中 文

暑い暑い夏でしたが、いつの間にかつくつくぼうしが聞こえるようになりました。本園のある名古屋では、8月終わりから鳴き始めますが、東北地方では夏休み前から鳴いているそうです。長い列島を感じますね。

夏休みに、他園の園長先生から面白いお話をうかがいました。

その幼稚園では、子どもたちは、煮干しを餌に毎日ザリガニ釣りをしていたらしいのですが、しばらくするとバツタリと釣れなくなったそうです。子どもたちはなぜなのかあれこれ考えたあげく、「そういえば、園長先生はなんか黄色いもので釣ってた」と言いだし、園長先生に質問にしたそうです。園長先生が餌にしていたのは「たくあん」でした。なんでも、園長先生が小さい頃には、煮干しはもったいないからたくあんで釣っていたとか。子どもたちはさっそく餌を「たくあん」につけ替え、釣って飼い始めたザリガニにも与えました。ところが、だんだんその「たくあん」も食べなくなります。そして、「たくわんの古漬け」にかえてみたり、別のものをさがしてみたりして、「ザリガニは結構いろんなものを食べる。でも、同じものが続かない方がよい」などと話し合い、図鑑を調べるようになったそうです。

また、その幼稚園にボウフラが湧いてしまったところ、園児たちは、ボウフラを珍しい生き物だと思ってせっせと採取し、水槽に移し始めたそうです。先生たちは思わず止めかけたものの「これは飼うしかないね」と、飼い始めたとか。ボウフラは水槽でどんどん蚊になっていきますが、子どもたちには、それが理解できません。これはたまたま近くで蚊が飛んでいるのであって、飼っている生き物とは別物だと考えたようです。そこで水槽に網をかけて、外から入ってこないようにしてみせたそうです。もちろん、網の中でボウフラは蚊になり続けます。それでも子どもたちは、「いや、誰かが網を開けた時に蚊が入って来たんじゃないか」と水槽を観察しつづけたそうです。子どもたちには、この夏は忘れられないボウフラの夏になったことでしょう。

こんな風に、遊びの中から生活の中から不思議を発見し、なぜだろう、ふしぎだなあとじっとみつめて考えるのは、幼児期ならではの「科学の目」ですね。それにしても、幼稚園でよく「ボウフラの飼育」を決断したものです！ボウフラについてはおうちでもぜひ！とお勧めするわけにもいきませんが、子どもたちがやってみようと思ったことを即座に否定せず、立ち止まって方法を考えると、さまざまな見る目につながるようですよ。

いつもよりじっくりととらえることができる夏を経た子どもたちは、大きくたくましくなります。さあ、秋も楽しんでいきましょう。

